

---

# はるかかなた

柴月四葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
はるかかなた

【Nコード】  
N7475D

【作者名】  
柴月四葉

【あらすじ】  
ハル姉こと守見ハルカ。史上最年少の女性宇宙飛行士であり、ぼくの血のつながらない姉。事故で死んだはずの彼女が再びぼくの前に現れた時、最愛の人「ハルカ」は、異星人「カナタ」になっていた。こんな世界なんか滅ぼしてしまおう。それがカナタの使命、ハル姉の願い、そしてぼくの……。

## その一

「いい、人は死んでしまふとね、みんな遠く遠くのお空に昇っていくの。そしてね、きらきら光り輝くお星さまになって、自分の大事な人をずっと見守ってあげてるんだよ」

ほんと？　じゃあぼくのお父さんもお母さんもお星さまになつちやつたの？

「そう、藍斗あいたのパパとママだってお星さまになつてずっと、ずっといつまでも藍斗のことを見守ってくれるはずよ。それにわたしだつて」

「わんつ！」と吠えたか「きゃんつ！」と吠えたか、まあそんなのはどつちでもいい。とにかく、突つ立つたまま動こうとしない飼い主を促そうと発せられたテラの吠え声ひとつで、幼稚園児でも子供だましと笑ってしまうだろうそんな話をあのころのぼくに教えてくれたあのころのハル姉は吹き消されたろうそくの灯のように一瞬でブラックアウトしてしまった。入れ替わりに眼前いっぱい広がったのはどこまでも深く広がる闇と、それを振り払うには余りにも無力すぎる　ハル姉の話に従うならばこう言えるだろう　無数の人の魂だけ。

ふうとため息をひとつ漏らして、ぼくは視点を南の夜空からぴーんとまっすぐ伸ばされたぼくの右腕とぴーんとまっすぐ張られた紐のその先で、まるで壊れかけた振り子みたいにおぼつかない足取りで右へ左へと揺れ動いている年寄り雑種犬へと移動させた。普段のテラならば、ぼくの歩幅に合わせてちゃんと決められた位置、大体ぼくの50センチぐらい前を先導するのだが、今日に限っては家を出てからというものずっとこんな調子だ。まあしょうがないだろう、なんたつて彼にとってはかれこれ五日ぶりとなる散歩なんだから。

そう、この話は五日前のあの夜、つまりハル姉が死んだ夜から始まるんだ。

## その二

テラと繰り出す夜の散歩は、いつごろから始めたか忘れてしまうぐらい長い期間続いていた。それこそ習慣と呼べるまでに。九時からだいたい十時の間までというこの時間帯も、家からガソリンスタンド、セブンイレブン、寂れた公園に二年前まで通っていた中学校と、この地区のシンボルをまるでスタンプラリーみたいに反時計回りに辿って家に舞い戻ってくるこのコースも、何も変更することなく続いた毎晩の習慣。

いや、でもこれは習慣というより儀式といった方が合ってるかもしれない。熱を帯びた空気でも顔に降りかかる雨でもそして満天の星空でもとにかくなんだっていい、日が昇ってからまた日が昇るまで、まあつまりは一日中『内の世界』に息をひそめて生息しているほうが、『外の世界』という存在を自分に認識させるための儀式であり、そして、こうやって毎日ちゃんと外に出て、外と触れ合っているのはただの引きこもりなんかであるはずがない！　ってことを自分に確認させるための儀式なんだ。馬鹿馬鹿しいけど。

そんなわけで、真南の方角、さそりの毒針を意味する星シャウラの近くにアンタレスよりも明るく輝く淡い光を発見したのも、今にでもプツンと消えてしまいそうにチカチカ点滅する外灯がおおよそ二百メートルおきに立っているだけの暗く静まりかえった路地を滑り台が目印、というか滑り台しか置いてない公園目指して進んでいったちょうどそのときだった。

それが飛行機だとかそういった類の光でないことは一目瞭然だ。動かないし点滅もしない、そこにあって、ただ輝くだけ。じゃああれはなんだ？　人工衛星……はあんなに明るくは光らないよな。やっぱり星かなんかか？　しかし、知識というデータベースにいくら問い合わせせてみても、《あの位置にはあんなに光る星なんてありま

せん》そんな答えが返ってくるだけ。

いっしておくけど、ぼくの知識はこと天体については完璧と自負しているつもりだ。何月何日何時にどこその方角に見える星座はなんなのか、そんなことはほぼ把握しているといってもいい。たとえば、七月上旬　二十一時頃　北の空　なんてキーワードをデータベースに入力する。するとデータベースは、入力されたキーワードから瞬時に全方位のプラネタリウムを頭の中に構築してくれるという寸法。北斗七星も夏の大三角も手に取るようにその位置がわかる！　まあなんて素晴らしい！　素晴らしいけどこれが学校の勉強には全く役に立たないんだな悲しいことに。だからぼくは勉強ができない、きつとそうだ。

……んなわけないよな、それとこれとはまったく関係ない。それにぼくは自分の学力が今どれくらいなのか、もう長いこと分からなくなってる。

まあ、それはともかくあの光の正体だ。頭の中に設置されている検索アイコンをどれだけクリックしたって出てこないあの光。

検索、検索、検索……。

光……、光る……、きらきらひかる……、宇多田ヒカル……。  
ん？

頭の中で『光』（もちろんこれは宇多田ヒカルの曲で、そして彼女の曲の中ではぼくが一番のお気に入りでもある）のサビ部分が何度もリピート再生されている最中、はたと思い浮かんだことがあった。

わたしはあそこに行くんだよ。

もう半年ぐらい前になる寒く澄み切った冬の夜、何ヶ月か振りに帰省したハル姉がぼくをベランダに連れ出し、東の空を指差して言った言葉。いや、別に「わたしは天国に行くんだよ」とか「わたしは星になるんだよ」とかそういう意味で言ったわけじゃない。第一

彼女に予知能力があるなんてぼくは聞いてない。

正確にいうと、ハル姉は東の空にかすかに輝く小さな光。日本がはじめて単独開発に成功した宇宙ステーション、『せかい』を指差したんだ。これ以上ない満面の笑顔で、ぼくがとうの昔に踏みつぶして失ってしまった『あの頃に夢見た未来』に目を輝かせて

…… ああそういえば、ハル姉がぼくに告げたのもあの夜だっけ。  
わたし結婚しようと思うの、って。

……。

……とにかく、ぼくはあの後とある天文サイトで見つけた、『せかい追跡ソフト』なるもので一度調べてみたんだ。時間の移ろいによつて『せかい』がどんな見え方をするのか、試しに指定してみたのはロマンチックに 七月七日 時間はちょうどぼくが外に出る九時から十時

ビービーガチャガチャ、壊れたかと心配するぐらい唸った後で、

ソフトは算出した軌道を画面に表示してくれた。

『せかい』は……

『せかい』はさそり座の上を滑るように動いていた。

きつと空の上では、宇宙史上最長の遠距離恋愛真つ最中のカップルが一年に一度の逢瀬を楽しんでいることだろう。しかし記憶の中からついに見つけた結論と、ついでにほろ苦い失恋の思い出を携えて今に戻ってきたぼくにはそんなのどうでもよかった。

あの光は『せかい』が発するものだ、それが導き出された結論。

じゃあ、どうしてぼくはそんなことにすぐ気づけなかったんだ？ なんとってハル姉のいる宇宙ステーションの光だというのに。

結論と同時に生まれた新たな疑問。しかし、今度はあつという間

にその疑問に対応する答えが用意されていた。

何で気づけなかったって？ 簡単なことさ、ギャップが激しかったんだよ。比べてみるよ、あの冬の日に見た『せかい』の光と今見ているその光を、明るさが全然違うじゃないか、これじゃあ二つが同一物体だなんてそうピンとくるモンではないぜ。

じゃあ、どうして『せかい』は半年前と今とであんなに明るさが違うんだ？ なんて訊ねてくる知りたがりはずでいなかった。ぼくの心の中でいきなり吹き荒れたブリザード並の悪寒に巻き込まれて凍死してしまったに違いない。

ちなみに、この疑問には見合った答えを用意できなかった、と言えばそれは嘘になる。ただ考えなかったことにしたいだけだ、それがあまりにも受け入れがたい仮説だったから。

ぼくの仮説が結局は当たっていたことを知るのは家に帰って来た後だった。泣き崩れた伯父と伯母。ニュースサイトの速報ページに悲惨さなどこれっぽっちも感じさせない無機質な文字の羅列で表示されていた記事。

《先ほど、JAXAならびにNASAは日本の宇宙ステーション『せかい』が原因不明の事故により消息を絶つたと正式に発表した。この件に関して、国内の多くの天文家などから『せかい』が爆発した」「あとかたもなく粉々になった」等の情報が数多く寄せられており、『せかい』は爆発事故を起こして崩壊したとの見方が濃厚だ。なお、史上最年少の女性宇宙飛行士として注目を浴びていた守見ハルカさん（24）ら乗務員八名の安否は絶望的とみられ》



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7475d/>

---

はるかかなた

2010年12月10日00時57分発行